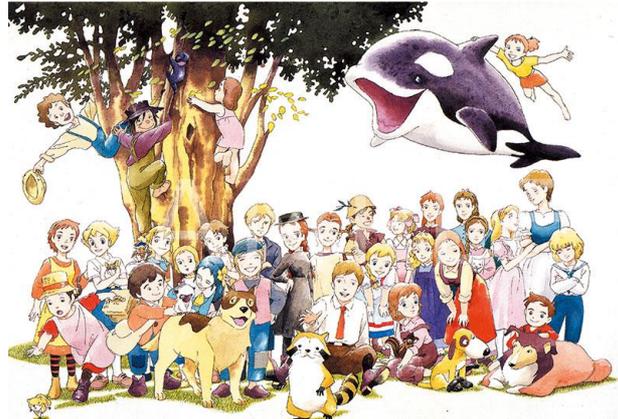


世界名作劇場

第9期 OB 竹内 亮介

第9期の竹内亮介と申します。現在、私は大学院の修士課程に在籍して、日々の研究活動に勤しんでおります。学部生時代から数えると研究を始めて4年になりますが、ここ最近、自分の研究活動において、大きな転機がやって来たのではないかと感じています。具体的には、「名作（論文）を読みたい！」という気持ちが、これまでになく高まっているのです。



世界名作劇場のキャラクターたち

そのきっかけを与えてくれたのは、Allan M. Collins と Elizabeth F. Loftus が、1975年に *Psychological Review* 誌で発表した“A Spreading-Activation Theory of Semantic Processing”という論文です。この論文は、当時の定説とは異なる視点から記憶の構造的側面を描写することに成功し、後続研究に絶大な影響を及ぼしたことで知られています。まだまだ読み解くことのできなかつた箇所も多く残されているのですが、私も実際にこの論文を読んでみて、斬新でありながらも共感せずにはいられないアイデアに深く感銘を受けました。何と表現すべきか難しいのですが、この論文に含まれる養分は、これまでに読んだ論文に含まれる養分とは、質・量ともに桁違いでした。無数の雑誌で無数の論文が毎年発表され、その大半がなかなか日の目を見ないでいる状況にあって、今日まで語り継がれてきた論文の説得力は、凄まじいと形容する他にないでしょう。

これまで私は、マーケティング論の各論としての広告論、その広告論の中でも自分の研究テーマに関連する論文を読むことのみで気を取られ、名作を読む機会を逸し続けていたように思います。専門領域を確立するに際して、自分の研究テーマに関連する論文を読むことは確かに不可欠ではありますが、自分の研究テーマに関連する／しないはさておき、将来は研究者を目指す私にとって、名作を読むことが不可欠なのは間違いありません。幸いなことに、私は、もはや「世界名作劇場」と名付けるに相応しい慶應義塾大学のメディアセンターやデータベースを自由に利用できる環境に身を置いているため、今後は、心行くまで名作を堪能していきたいと考えております。もちろん、「名作だから」と権威に盲目的になっては本末転倒なので、批判的精神も忘れずに。